

国立公園の噴気孔

カルデラとは

阿寒摩周国立公園は東日本火山帯沿いに位置しており、この国立公園の地形の特徴であるカルデラは、何度もの火山活動によって形成されました。カルデラとは火山活動により大きく陥没してできた地形のことを言います。公園内には阿寒、摩周、屈斜路という3つのカルデラがあり、公園内の景観や生物に大きな影響を与えています。

ここ阿寒地域は阿寒カルデラが存在しますが、その大きさは直径10kmを超えます。これまでの研究から、阿寒カルデラは、130万年以上にわたって起こった爆発的噴火により、約15万年前におおよそ現在の形状になったことがわかっています。その後も幾多の火山活動を繰り返し、現在のような山、湖、川の配列ができたと言われています。

ボッケの特徴

この地域で現在もなお、見られる火山活動の1つに、ボッケという、地下から火山ガスと泥が連続的に沸き上がる、煮え立つ現象があります。泥火山の一種です。ボッケは、阿寒湖畔沿い、フレベツ岳や白湯山の展望台付近で見ることができます。ボッケ周辺では地熱活動があるため、年間を通して土は暖かく、真冬でさえも地面に雪が積もりません。この珍しい現象のため、ボッケ周辺では通常は温帯で見られるマダラスズ（コオロギの一種）ヒメハギ、テンツキ、ヒカゲノカズラのような植物が、見られます。厳しい冬の間、餌が容易に得られるボッケの周りに、エゾシカが集まっているのをよく見かけます。

また、雌阿寒岳は、北海道で最も活発な活火山の1つとして知られおり、山頂まで行くと、噴煙を上げる荒々しい火口を見ることができます。最近では、2006年と2008年に小規模な噴火を起こしました